

# 明治天皇の御治蹟と世界の大勢

文學博士 箕 作 元 八

今日述べますことは別に新らしいことではございませぬ。實は二箇月許りに横濱の基督教青年會に於て明治天皇の記念會をすると云ふので、それに參つて講演を致しましたことを再び申上げるのでございませぬ。今日丁度先帝御誕辰の記念日に於て此話を諸君の前に致しますのは私の光榮と致しますのでございませぬ。併ながら既に加藤さんに申上げました通り別に深い學術的の話ではなく、極く詰らな  
いことでありまして、或は諸君に申上げるのは失禮かも知れませぬが、明治聖帝と世界の大勢との關係に就いて、一通り感じた所を述べることに致します。時間がないから極く簡単に申上げやうと思ひますも  
大體に就いて申しますと、明治天皇の御生れになりました時から御崩れになりました時までの間と云  
ふものは、世界の形勢の非常に變はつて來る時であつたのでございませぬ。歴史は始終變化を示して居り  
ます。十年一昔と申しますが、やはり一國に就いても世界の大勢に就いても、十年或は十五年位經つと  
少しづつ變はつて參ります。殊に近世になりましたは其變化が迅速でございませぬ。太古の時代に於ては  
餘り著くないが段々近世になる程其變化が甚しくなつて來た。つまり東西人類相互の關係が段々密にな

つて来る。初は東洋と西洋と全然隔つて殆ど關係のない様であつたのが、それが段々密接して世界的になつて来た。教科書などは東洋史西洋史などと別けてありますが、實は今では世界歴史より外にないのでありまして、今後の我が國史も亦世界歴史を飾る所の大なる裝飾となる所の一つの歴史でなければならぬのであります。

先づ明治天皇の御降誕になりました年が嘉永五年（一八五二年）でありますから其年から始めます。勿論何年と云つて時勢と云ふものは判然と別けることは出来ませぬけれども、大凡の處を別けて見たのであります。

第一期 嘉永五年（一八五二年）より萬延元年（一八六〇年）まで

第二期 萬延元年（一八六〇年）より明治四年（一八七一年）まで

第三期 明治四年（一八七一年）より明治十三年（一八八〇年）まで

第四期 明治十三年（一八八〇年）より明治廿八年（一八九五年）まで

第五期 明治廿八年（一八九五年）より明治四十五年  
大正元年（一九一二年）まで

斯様に別けてお話を致します。是れが丁度明治天皇の御事蹟に能く當つて居りますのみならず、又明治天皇の御事業の上にも其影響が明らかに見えるのでございます。

第一期の初年即ち嘉永五年（一八五二年）は先帝の御降誕になつた年であります、是れはアメリカ

の提督ペリーが本國を出發した年であります。ペリーは諸所を廻り、長く掛かつて參りましたからして、來朝したのは其翌年（嘉永六年）でありますけれども、出發したのは此年であります。つまり世界の大勢が日本の孤立を許さない様になつたのであります。段々人智が發達して蒸汽船なども出來ました爲めに、以前には貿易風によつて一定の時期を切つて來たものが、今度は時期を擇ばずにやつて來た。嘗に西の方から來るばかりでなしに、東の方からも來ると云ふことになつた。北太平洋の毛皮獸の獵が盛んになつて。ロシヤやアメリカから獵船が頻りに來る。さう云ふ風になつて、段々世界の交通が發達し世界の經濟が發展するに隨て、日本はもはや何うしても孤立することが出來ない形勢になつて來たのであります。

世界の氣勢から申しますと、ヨーロッパに於ては、此の千八百五十二年はフランスのナポレオン三世が帝位に即いた時でありまして、其後凡そ八年間と云ふものはナポレオンの最も得意の時代で、フランスが殆ど總ての政局の中心になつて居りました。フランスが這入らなければヨーロッパの事は何事でも決することが出來ないと云ふ位になつて居つたのであります。そこで此間に佛蘭西がいろ／＼活動しまして、クリミア戰爭なども此時にあつたのです。又英佛が聯合して支那を攻めた。又ナポレオンの後援により、ワラキヤ、モルダヴィヤ二國が合同して、ルマニヤ國が出來て、未だ全く獨立ではないけれども興り始めた。即ち民族の統一と云ふことが實際に行はれかゝつて來る始であります。最も民族統一の

大くなりましたのはイタリヤの統一でありまして、千八百五十九年にサルヂニヤとフランスとが聯合してオーストリヤを討ちました。それまではオーストリヤがイタリヤに於て覇權を握つて居つたのであります。東北の方はオーストリヤに屬し、西北はサルヂニヤ王國に、南方はナポリ王國に屬し、中央は法王領並にモデナとカバルマとか云ふ小さい公國が澤山あつた。さうして奥國の勢力が到る處に蔓つて居て、即ちイタリヤの統一に反對であつたのであります。所がサルヂニヤが統一の中心になつて、佛の援を借つて此戰に勝ちました。

此際に、初はナポレオン三世は何處までもイタリヤを援けてオーストリヤをイタリヤから全く驅逐しサルヂニヤの下に統一をさせやうと云ふことを約して置きながら、此戰の末に至つて急に奥國皇帝と密會して、兩者の間に自分の都合の好いやうな結末を付けたのであります。と云ふのは、ナポレオン三世は、伯父ナポレオン一世が餘り侵略を行つて國民的感情を無視したから失敗したのである。自分は民族的統一運動を助けて其代りに或報酬を得やうと云ふ考であつた。所がイタリヤが本當に統一しかけて來ると、佛人がそれを喜ばないと云ふことになる。又一つは餘り長く奥太利と戰つて居ると云ふと、プロシヤがオーストリヤの味方をして西側よりフランスを脅かすと云ふ虞がある。さ云ふ處からして、ナポレオン三世は中途に方針を變へて、僅に奥領のロンバルヂヤ地方だけをサルヂニヤに讓らして、あとは結合の弛い聯邦を作り、法王を盟主として己れ暗にその保護者とならうとした。

併ながら民族運動と云ふものはなかく政治家の力を以て抑へることが出来ないものであるから、一旦運動を起した以上は伊太利の人民が奮起して、翌年になつてガリバルヂなどが義勇兵を率ゐてナポリ王國に侵入した。又中央諸小國の人民は皆サルヂニヤに合同することを主張した。そこでサルヂニヤも餘儀なくサヴオイ、ニースを佛に割讓して、僅にナポレオン三世の同意を得て漸く統一を遂げた。併ながら其統一を遂げる爲めにはガリバルヂの生地である所の地方を讓つたのでガリバルヂは非常に不平で退隱した。のみならずヴェニス地方を矢張り奥國に残して置かざるを得なかつた。是に於てナポレオン三世を民族統一運動の友なりと信じて居て、イタリヤ人は非常に彼を悪んだ。又歐洲の他の諸國も彼がサヴオヤ、ニース併合を見て、大にナポレオンの野心を疑つた。そこで千八百六十年即ち明治天皇第一期の最終年頃になつては、ナポレオンは統一に同意はしたけれども最早ナポレオンの信用と云ふものは地に墜ちて來た。是れがナポレオンの得意時代の終りでございます。

此時代には日本では何うかと云ふと、丁度開國に對する非常な騒動の時に當るのであります。これは細かく言ふ必要はありませんが、ペリーが先づ嘉永六年に參りまして、それから英佛露などといふ國々が參つて續々條約を結ぶと云ふやうな次第で海内が沸騰した時であります。

第二期はナポレオンの失意の時代であります。前の様に得意でないからナポレオンのすることが甚だ投機的であつて、何うかして此勢力を恢復しやうとして煩悶した處が能く見えるのであります。あちら

に手を出しこちらに手を出した。例へばメキシコに我保護の下に一帝國を造らうと企つて、合衆國からやかましく言はれて遂に撤兵した。どうか一つ旨いことをしやう勢力を恢復しやうと云ふことばかり企つて居つた時代である。それにも拘らず、オーストリアとプロシヤとの戦がありまして、奥國が負けドイツから抛り出されて、さうしてプロシヤを中心とした勢力隆々たる北ドイツ同盟と云ふのが出来た。前には必ずフランスが干渉して事が極まつたのが、今や佛國の興ることなくしてヨーロッパの地圖の大變化を見るに至り、佛國は全く度外視されたのであります。之は佛の大なる不名譽であつて、ナポレオンをしてその勢力を失はしめたのであります。それでこの煩悶せるナポレオン三世の事は、我日本にも多大の關係があるのです。

日本は何う云ふ時であつたと云ふと、開國の事からして天下の人心が動きまして遂に幕府を倒さうと云ふ運動が起つて居た時であつた。尤も前から勤王と云ふことはありましたが、さう云ふ理想と云ふものは大抵ははつきりしてゐないので、ぼんやりして居るものが後に至つて實行されるのである。例へばルソットの共和政治の考にしても、ルソー自ら其れが行はれるとは思つて居なかつた。ルソーの書物を見ると分りますが、彼れ自ら共和政治と云ふものは天人の國ならば行はれるけれども人間の國に行はれないと云ふことを述べて居る。それであるからルソーは其れが實際に行はれると思つたのではない。唯理想として云つたことが多いのであります。此外にもルソーは理想を多く云つて居りまして、其れで

寧ろ誤解されることが多いのであります。然しながらルソーの理想として居つた所の共和政治は、後にルソーの論の系統を承けた者の爲めに遂に實現されたのであります。高山彦九郎の時代に現今の様な御親政と云ふやうなことまで考へて居つたと云ふことは一寸分らない。さう云ふ理想はあつたかも知れぬが、實は理想に止つて行へると思つて居つたか何うか、それも分らない。其頃には所謂皇室の式微と云ふことを憤慨して居つた。それは事實でありますけれども、それならば何う云ふ風にしやうと云ふ様な明かな手段まで考へてゐなかつたのである。所が開國と云ふことが導火線になつて愈々幕府を倒さうと云ふ運動が起つて來た。

此第二期間の我國の有様は實に混亂を極めて居る。即ち千八百六十年は櫻田事件のあつた時である。夫から引續き、或は鹿兒島砲擊事件であるとか、下關砲擊事件であるとか、長州征伐であるとか、遂には明治元年に所謂戊辰の亂があつた。それから明治二年に奉還と云ふことがあつた、けれども、まだ本當に其れが行はれて居らぬ、唯々理論上で諸侯が國を御還し申上げた丈で、やはり元の藩主が知事になつて、封建制度は依然存して居つたのである。而して明治四年に至つて本當の廢藩置縣が行はれた。

此の明治四年と云ふ年には、ナポレオン三世が愈々堪らなくなつてプロシヤと戦つてたが、南ドイツ諸國は兼ねて普國と秘密同盟があつたからして、中立もせず、フランスに同盟せず、反つてプロシヤに同盟し、さうしてナポレオンが終に倒された。即ち第二期は全然ナポレオンの失意の時代であります。

我國との關係に就いて申しますと、ナポレオン三世が投機的の政略を行ふ時分であつて、日本のことも口を出しかけた。其時分の佛蘭西の公使や領事の送つた手紙などは餘程幕府に好意を表して居る。さうして、いろいろ外の公使について斯う云ふ風に返事をしるあゝいふ風に返事をしると云ふことを教へて居る。大學にも文部省から引継ぎました文書がありますが、又是れは其中に載つてはありませぬが餘程確かなことのやうに思はれる事があります。それは佛公使ロツスが幕府に向つてほめかした、兵器彈藥軍資等を以て助けてやるから、朝廷に對して確りやれといふ事をほめかしたのであります。之は我國の爲め由々しき大事でありまして、若し之に従へばイギリスも亦勢力平均上官軍を盛んに助ける。他の國では随分内亂からして外國の干渉が入つた場合が幾等もあります。然るに幸にも徳川家に於ては、家より國を重んじ、素より勤王の心に於て敢て他に譲つて居らなかつたから、佛公使の申込を謝絶したのであります。兎も角もナポレオン三世が頻りに手を出さう出さうとして居つたけれども、段々歐羅巴の形勢が危くなつて來た、又ルクセンブルグの問題などが起つたりして、もはや東洋の事に手が出せなくなつたのは、我國の幸であります。ルクセンブルグの事件は明治三年に當つて居りますから、丁度御維新の時分が騒いで來る時代であります。

▲第三期はヨーロッパに於て政局を整理する時代であります。即ち從來フランスと云ふ強國が中心になつて一通り系統が定まつて居つた所が、其佛が俄然倒れてしまつた。第一等國であつたものが二等國以



下の弱い國になつて、さうして新にドイツと云ふ非常な盛な國が出来た。丁度地震で家屋が毀れたやうな有様になつた。其際にロシアはパリ條約を廢棄すると、イタリヤはローマ府を占領して之を都にして丁ふと云ふやうにいろ／＼な事があつて、其後がなか／＼鎮まらない、地震でも大地震になれば一度では濟まない。餘震といふものが續々来る。なか／＼人が安心が出来ない。ドイツは非常に勝ちましたけれども、餘り事業熱を起した爲めに經濟上大恐慌などがあつた。フランスでも、獨がもう一遍佛を破つて今度は佛が貧血して青くなつて了ふまで出血させてやらうとして居るとの風評を聞いて戰々競々とした。さう云ふ風にして餘程ヨーロッパの形勢が危い時で、なか／＼他へ向つて手が伸ばせない。斯う云ふ時代であります。

然るに此時代の末頃になりますと何うか斯うか片付きまして、まだ公然と同盟は出来ませぬけれども形勢が自然と出来ました。即ち露國と佛國との間に密接な關係が段々出来て、まだ公然同盟は結ばなくつても、隨分事に依つたら聯合してドイツに當ると云ふやうな形勢が見えて來た。それに對して奧國と獨國と同盟を結んで來た。又イタリヤも遂に八十三年に加つて、此所に三國同盟が成立すると云ふことになつた。兎も角勢力の平均が出来て來て何うか斯うか新たに歐洲の政局面が定つて來た。即ち佛國の大敗に依つて崩されたものが復た新たに固定して來たのであります。固定して來ると、この勢力平均を保つ爲めに各國皆軍備を擴張して、互に睨み合の姿となつて居る。

そこで若し爰で一旦戦争が起つたときには、今度はどの位の慘禍を生ずるかも知れぬ、依つて此現状を成る可く破りたくないと云ふ考が何處の國にも起つて來た。佛に於ても、一時獨逸に對する復讐の聲が聞へないではなかつたけれども、今は國民の大部分は段々平和を重んじてさう云ふことを言はなくなつた。つまり一方に非常に生産が發達して來て、一方に軍備兵器が擴張改良された結果、戦争と云ふものが非常に恐ろしくなつて、云ひ合した様に成る可くは衝突を避けるやうにする。根本の國は互に一歩も譲らないが、衝突は成る可く避けたいと云ふ内々の彼等の考がありますからして、そこでヨーロッパは所謂武裝の平和を保つて、却て安全になつたのであります。併乍ら實力と云ふものが内に満ちた時には、必ず之が外へ伸びて來ると云ふことは、是れは歴史上いつも現れる所の現象である。そこで植民政策と云ふものが第四期に入る前後から始まつて來た。

それで上に述べた千八百七十一年から八十年までの時期は、日本では少し時期の堺目に出てはありますけれども、先づ大體が明治の破壊時代であります。此間に隨分建設のこともあるけれどもそれは多くは極幼稚なものであつて、多くは舊物舊制度の破壊である。破壊も随分ひどい破壊であります。私は或ドイツ人の旅行日記を見ました。プロシヤの貴族ですが、丁度明治の初に日本に旅行しまして、さうして岩倉さんや木戸さん杯の人々が盛んに封建制度を廢して仕舞ふと云ふのを聞き、それから名古屋に行つて藩侯に金城内に招かれてから、その感じた事を述べて、『斯う云ふ堂々たる城がある勢の處で、何う

して封建制度がそう容易に毀すことが出来るものか」と書いてあります。それは成程外國人から見たら然うであらう。日本では萬世一系の皇室の大威力があると云ふことは外國人には分らない。外國で斯う云ふことがあつたら何うしても非常に騒がなければならぬ。僅に十年や二十年で出来ることでない。非常に長い間續けて暴力を以て抑へ付けるより外ないけれども、明治天皇の御力で斯様な大業が及に血塗らずして行はれたのであります。尤も此破壊政略とても、随分失敗もあり又困難もありました。一時は巧利主義が甚しくつて、上野の山の松を皆伐つて了つて桑を栽えろなんといふ議論もあつたさうです。また名所の松の立木などは良いものをドン／＼伐つて了つた。或は奈良にある五重の塔を拂下げやうとし、これを買取る者が其儘焼いて金を取らうとしたので、類焼の虞があつた爲めにのみ此亂暴な拂下も中止されて、今は國寶となつて居るといふやうな話もある。随分亂暴なことをしたものであるが、併し其位の勢でなければ出来なかつたらうと思ふ。さう云ふ時代であつたが、尙中央集權に對する地方的の運動と云ふのが必ずなくてはならぬ。萩、秋月、熊本、鹿兒島の亂に就いて、私は無論正邪などを論ずるのではない、當事者の心事目的は色々あつたらう、けれども冷靜に大局より見れば、兎も角も中央集權に對する地方的運動の色彩は帯びて居たといふことは斷言出来ましょう。これは即ち明治破壊時代に於ける困難苦痛であります。之が爲めに多くの英雄を倒し、多くの有爲の壯年者を殺し、又非常に財力も費やして、後數年の財政困難を残したのである。然るに、此吾國の弱つて居る時に、甚しき外國の干涉が加

つて來なかつたといふのは、前に述べた通り、歐洲列強が佛國大敗後の政局整理問題に忙しくして、側目も振れない時で、極東の方に手を出す餘裕がなかつたからであります。

第四期は世界政策の大發展の時代即ち植民政策の時代であります。前からも多少あつたけれども併し此の時代になつて大に發展をした。例へばドイツの如きは人民が既に千八百八十年頃には大分東西に活動して土地を取らうとして居る者があつた。然しビスマルクは初めは之に反對であつた。それより先づドイツ帝國を固定することに全力を注がなくちやならぬと云ふので、其方を専らにして植民政策には寧ろ反對であつた。商人などからして保護して呉れと言つても承知しないので、其保護方をわざ／＼イギリスに頼むで見るといふ様な遣り口であつた。所が英國は一方に於てはアフガニスタンに於て、ロシアの南下に對し非常に警戒して居つて、同時に埃及の單獨保護者となつて、爲めにフランスからも惡まれ、エジプトの南にマーチーの起つた爲めにスーダン地方を棄て、了はなければならぬ。さう云ふ風になつてイギリスが頗る多事の時であつた。其時にドイツの植民政策の方針が變はつて大に手を出し初めた。是れは政府と國民との意氣が合つて行つたのであります。一體國土の發展と云ふものは政府と國民の意氣が合つて行かなければならぬので、此時に發展した獨人の勢と云ふものは非常なものであつた。或は人に知れないやうに勞働者の着物を着て三等客になつて行つて、上陸してから土人など、條約を結ぶ。條約を結ぶと云つても何でもないので、野蠻人には條約の内容の眞意などは全で分つては居らない。詰

らない金色か何かしたものを遣れば土地は幾らでも分けて呉れる。一體野蠻人の文明人との交渉には、文明人の方が随分悪いことをすることが多いのです。大抵土人が條約を破つた杯と云ひますけれども、多くは文明人の方が破つて無理をして居るのです。どうも臺灣邊りで日本人のやることを見ても土人の方が可哀相だと思ふやうなことがあるそうです。一體云ふと蠻人が元來其所の土地の主人で、外來人は押掛客なのです。その客が跋扈するといふは不都合千萬である。去りながら、どうも之は致方がない。自然の富源のある處を野蠻人が獨占して居ては、人類全體の上から言へば面白くないのであります。何故なれば蠻人は其れを開拓すると云ふことを知らない。人道の上からは、無論氣の毒だけでも仕方がない。さう云ふ風にして四五年の内に非常な宏大な土地がドイツ領となつた。千八百八十年前のアフリカの地圖を見ますと、海岸の外の所はまるで分らない。海岸地の分界すら餘り判然して居なかつた。然しイギリス人は最早く各地に往來したから、多少先取權がないでもない。若し英人が「是れは己れの勢力だから他から手を入れさせぬ」と云へば、云はれぬことのない地方が澤山あつた。併し前にも言ふ通り、英國の方もアフガニスタン、エジプト等に多事の時であるから、餘りやかましく言ひ得ないので、大抵なことは黙認若くは泣寝入になつて居つて、各國が、ドンドン植民地を取りました。けれども、英人は流石に慥巧だと感服するのは、他國人の占領を黙認した土地は多くは悪い土地ばかりである。好い處はやはりイギリスが押へて置いてあります。暑くつて堪まらない處や、人口の少い處や、人民の獍猛

な處、さう云ふ處ばかりを他の國に取らした。

要するに此時代は世界政局の發展時代であり、その運動はアフリカが手近で、土人の抵抗が少いから専らそれに向つたので、極東の方などには餘り手を出さなかつた。一體是迄の世界政策と云ふものは英佛が主になつて居つて、其中でも英が主であつた。昔は地中海が中心であつたが、アメリカが発見されてからイスパニアとポルトガルが盛になつて來た。併ながら其れに續いて出て來て凌駕するやうになつたのがオランダである。オランダが一時は世界の海上を支配して居りましたが、其蘭が英の爲めに大打撃を受け、それから十八世紀に於ては英と佛とが植民政策に於て非常に競争した。七年戦争とか、オーストリア相續戦争とか、アメリカ合衆國獨立戦争、佛國大革命戦争、ナポレオン戦争、此等の戦争は重にヨーロッパ大陸上の大事件であるが、世界史の大局から見れば、實は英佛の世界政策の競争に附屬した出來事であります。さうして佛が負けて英が勝を得た。イギリスは今でも世界政策に於ては第一位にあるけれども、併乍ら千八百八十年頃には各國は英の足許にも寄ることが出來ないほど此點に於て勝れて居た。ナポレオン三世が植民政策などを盛にやつたけれども逆も及ばない。ロシアは陸上から段段擴がつて行きましたけれども、併し是れもイギリスに比すれば僅かなものである。然るに此世界政策上殆んど相手の無かつたイギリスに對して、一八八〇年頃から多の競争者が一時に出て來た。英は是迄一人舞臺であつたのが一人舞臺ではなくなつて來た。

そこで此時代の日本は何うであつたかと云ふと、是れは日本の眞の建設時代であつた。眞の建設時代は明治十二三年頃、鹿兒島戦争の疲弊が稍直つた頃から始まつて居る。其時分から長足の進歩を爲し、實際の建設的事業が行はれて、政治、國防、經濟、教育、凡ての方面に於て發展して來た。さうして其末に於て日清戦争があつて、此戦争で日本の實力を顯した。即ち此時代の末に於て日本と云ふものが世界列強の中に這入り始めたのであります。初は其程でなかつたけれども、機敏なる英人などが先んじて條約改正を行つたことを見ても分ります。而して此建設事業は歐洲列強が全力をアフリカに注いで居る間に行はれたのであります。

第五期は何うかと云ひますと、最早アフリカの分割は済んで了つたけれども、まだ後の整理を付けるのに大變骨を折つた。そこで互ひに譲り合つてコンゴ自由國と云ふものが出來た。コンゴと云ふ非常に大きな地面があつて、萬國の會社がある。學術宗教の爲めに起した所の會社がある。其萬國の會社と云ふものが遂に會長にベルギー王を戴いて宏大なるコンゴ自由國と云ふものが出來た。其處で元は各國共通の利益を計つたのであるから、コンゴで關稅などを取ることをしなかつた。所が初の主義が變はつてコンゴ國になつてから輸入税などを取り、終にはベルギーの屬國となつて了つたのであります。是れはベルギーが一番弱少であるから、之に取らしたので、若しイギリスやフランスが取ると云へば、不都合であるとドイツ以下が反對しませうし、ドイツが取ると云へばイギリス杯が承知しない。さ

う云ふ風で、一番弱少で反對のないベルギーが持つことを許されたのである。さう云ふ風にして何うか斯うか、アフリカの分割も片が付いて了つた。みな戦争をしたくはないから互に妥協をするのでありました。

さてアフリカ分割が既に終つて、植民熱の鋒先が何處へ向つたかと云ふと、今度は太平洋方面に向つて來た。同時に亞米利加合衆國が發展した。亞米利加合衆國と云ふのは土地が廣くつて今でも開拓しない處が澤山ある。段々開拓を擧げて來るに伴つて、以前には輸入品に保護税を澤山掛けたのが、其保護税を廢すやうになつた。これは國內の製造が盛んになつて、もはや保護を要せぬ。反つて外國に販路を求めるとなつた。是に於て、モンロー主義などは段々侵略的になつて來るのであります。モンロー主義の事を仔細にお話すると長くなりますから、今日は申しませぬが、モンロー主義は元はアメリカ大陸のことに對してヨーロッパ各國から干渉をさせまい、又新たに土地を得ることを許さないと云ふやうなことがあつた。それが更に進んで、アメリカ大陸のことはアメリカ合衆國が支配する、合衆國が總主權を握る——さうは云はないけれども、さう云ふ様な意味になつて了つた。そののみならず、アメリカ以外の處へも手を出さぬと云ふことになつた。此時期に於てハワイの合衆國人が革命を起して、本國と合併せんとした。其時は兎も角本國が承知しなかつたので、ハワイはサンドウキツチ共和國となつたけれども、合衆國人が侵略的に發展して來たと云ふことが分る。



それで歐洲各國はアジヤ方面には既に段々來て侵略しては居ましたけれども、併し極東の方だけは未だ思ひ切つて手を出さなかつた。と云ふのは、日本が既に餘程實力が出來て居るし、又支那と云ふものを無知數とし眠れる獅子などと多少怖れて居て、是れが一たび覺醒するときは大變なものだと云ふ風に考へて、未來アジヤの運命を決するものはロシア、イギリス及び支那であると云つて居つて、支那と云ふものを餘程怖れて居つたからであります。所が日清戦争で以て、支那は案外に弱いと云ふことが分つた。そこで競争の起つて來た結果、遂に此第五期に於て日露戦争と云ふものになつた。是れは雷に、日本の爲めに大事件であるのみならず、世界の、大事件であつた。それで此最後の時代は日本の雄飛時代と云つても宜いので、明治天皇の崩御、現今までも續いてあるのです。

之を以て觀ますと、日本は餘程好運な時に際會して居るのであります。即ち千八百五十年六十年頃には随分危い時期でありましたけれども、六十年期の末頃から段々歐巴羅の形勢が混亂して來て、それから千八百七十年期以後八十年頃まではヨーロッパが政局の整理に忙しくつて他を顧ることが出來なかつた。この時、日本は舊弊打破に日も之れ、足らざる有様でありました。次にヨーロッパ政局の整理が定まつて、各國はアフリカの方面に忙しくあつた、其時に日本は頻りに建設的、事業をなして、國本を培養して居りました。されば第五期即ち各國が極東に向つて來た時には、既に日本の實力が出來て居つた。否支那を破つて、西力東漸を促した。さうして見ると日本は餘程好運な國であると思ふ。實に先帝陛下は天

佑を有つて居らせられたのであります。併ながら天は己れを佑くる者を佑くるので、自分から佑けなければ幾ら天佑があつても仕方がない。斯かる時期に於て眞乎に十分に御努力遊されて、日本を一等國にするに至つたと云ふのは實に先帝陛下の御偉い處でありまして、又是れに對して吾々は其御恩を忘れることは出来ないと思ひます。

先帝陛下は實に日本の進歩の權化であると私は思ふのであります。昨年崩御のことを承りました時分にも私は非常に感じました。丁度夜の一時過ぎでございましたが、號外を見て驚きまして直ぐ參内を致しました次第であります。誠に自分は何とも言へない悲しい感じが致しました。是れは皆様も全く御同感でありましたことと思ひますが、宮城内に這入つて行つて蓮池の邊りを通ります時分に、まだ參内する人も多くありませぬで極く静かでありまして、私は多少人生觀と云ふやうなものを感じたのであります。即ち人間は精神が最も大切であると云ふことを感じまして、先帝陛下は御崩れになつても、其御精神と云ふものはなくならない。斯う思ひまして先帝陛下に對し奉り一層の崇拜を覺へ、且つ之が爲めに幾分か悲みを抑へることが出来たのであります。先帝陛下の御詔勅を見ましても、亦御製の御歌などを見ましても、其他平素の御行狀のことなどを泄れ承りましても、陛下は實に非常に御眞面目で御熱心で在らせられたと云ふことを深く感ずるのであります。恐れながら、先帝陛下は實に日本國民の大精神ナシヨナル、ジニヤスを代表して在らせられた、即ち根本國是の爲めに眞面目に努力すべき模範を御示し

遊れましたのだと考へます。斯う云ふ精神と云ふものが全くなくなれば、日本人は決して發展するところが出來ないと思ひます。然るに明治の初には人民は餘程國家的觀念が強かつた。それが有ゆる階級にあつて、獨り教育のある武士ばかりではない、一般の人民が御國の爲めといふことを深く感じて居りました。例へば實業方面の人でも、輸入を防ぐとか何とか云ふことをやつて、日本の國家の爲めに事業をすると云ふことが確かにあつた。所が段々國力が發展して明治の末頃から今日になりましたは大分其精神が弛んで來たやうに思ふのであります。さうして投機的の考が盛になつて、眞の實業以外に投機で金を儲けやうとのみ致す者が甚だ少くない。又利己的政略を行はんとする政事家などが隨分有る様であります。これは先帝陛下に對し奉りて眞に恐多いことであると思ひます。

私はオランダの盛衰を調べて深く感じましたが、前に申しました通りオランダは十七世紀の中頃には世界第一の富強の國であつた。併ながら段々精神が弛んで來た。元來蘭は商業を國是として居る國でありますから、條約其他により利益を得なければならぬ。そこで、第十七世紀の初年には、蘭の海陸軍は非常に盛でありまして、それが爲めに他の國が彼れに利益ある條約を與へなければならぬ。蘭は他の國を壓迫して戰はずして、その競争を壓へて居つた。然るに英佛等が蘭の富強を羨み、如何にもしてその利益の一部なりとも奪はんとした。然るに第十七世紀の中頃に至り蘭人の精神が弛んで、一方には軍備を縮小し、一方には如何なる代價を拂つても平和を維持し商業を害せざらんとした。然るに他の諸國は

之に乗じてオランダを抑へんと計つた。イギリスの如きはクロンウエルが此目的を以て歳入の半額を以て海軍擴張に充て、さうして航海條例と云ふ法律を作つて、從來蘭人の獨占した利益を奪ひ、蘭人の抗議を少しも顧みないで、終に挑戰的態度に出でて、蘭人は否々ながら開戦せねばならぬことになり、而して此蘭人が海軍を怠つた結果非常な損害を被つた。流石にオランダであるから一戰にしては衰へませぬが、三度まで戰爭を重ねる内に段々弱つて來た。特に三度目には佛がその大陸軍を以つて蘭に攻入り、殆んどこれを滅さんとした。オランダ人は辛ふじてこれを撃退したけれども、これが爲め國力が非常に衰へた。弱つて來ると、其商業上の利益ある主張も外國に尊敬されませぬ。英佛は非常な輸入税を課し、一方に内地の製造を盛んに奨励したのみならず、佛は自國産の原料に重い輸出税を課した。そこで自國に原料の無いオランダは外國から物を廉く買ふことが出來ない。その結果、十七世紀の末頃よりオランダでは段々製造物の輸出が減ずるのみならず、外國品の輸入が防げなくなつた。例へば紙とか帽子などといふものは蘭の專賣輸出品であつたのが、そんなものを他から輸入するやうになつた。是れ等の事は細かくお話致しますと統計的になりますから今日は申しませぬが、さう云ふ風になつて來て、蘭は平和さへ守つて居れば宜いと云ふので無暗に平和を守つた。平和を守るのは正當だけれども、それが爲めに段々に讓歩して事勿れ主義に陥つた。これが國民の企業心に影響して大に之を萎靡してしまつた。

併乍ら尙ほ蘭は富んだ國でありましたからして、金を外に貸すと云ふことを始めた。金貸業を始めた。

金を貸して他の國の産業を發展し、反つて自國の産業はさつぱり出来なくなつた。さう云ふ風でありま  
すから、人が成るだけ面倒な仕事をしないで一刻も早く金持になると云ふことばかり理想とするやうに  
なつて、眞面目に事業を爲す者が無い。さうして若い者が皆ずるくなつて、法律で禁じないことなら何  
をしても構はぬと云ふ風で非常に信用の出来な事になつた。一體金を貸すと云ふことは餘り頭腦を  
費やす必要がない。少し利巧な番頭に任かせることも出来る。隨て自分は安逸を貪つて暮らして居る。  
そこで精神が非常に腐敗して来る。蘭人もさう云ふ點に於て精神が腐敗して來た。つまり人間は眞面目  
に努力しなければ意味のない穀潰の虫だと私は思ふのであります。是れは何人に取つても同じことで、  
學者でも軍人でも實業家でも眞面目の努力と云ふことが必要である。殊に實業家と云ふものは富を得る  
ことが其正當な目的である。然し自分が富むと共に矢張り國も富むといふ様にあれば結構であるけれど  
も、併し自分ばかり富んでも國が富まなければ仕方がない。乃ち事業をしても其事業其者に忠實でなけ  
ればならぬと思ふ。唯々株の高低の上前を取つて自分丈金を儲けると云ふことばかりに苦心して、事業  
の方は好い加減にして、その最後の成不成は思はないと云ふ遣口ならば、其れこそ最も排斥すべきであ  
る。即ち國の賊であると思ひます。

明治天皇陛下は今申す通り非常に眞面目に努力を遊された御方でありまして、此眞面目の努力と云ふ  
ことは何より大切であると思ふのであります。才と云ふものは大切であるが、才より尙ほ其上に精神が

大切であると思ふ。所が世の中には眞面目な地味な仕事をして居る者を冷笑して、策略を以つて早く成功する人を羨む様な氣風が近頃大分盛んである。これは實業のみならず政事家、學者軍人の内にもこの才子が拔扈するやうである。私はそれは不祥な現象であると思ひます。日本と云ふ國は前にもお話がありました通り洵に優れた御國體を有つて居る、さうして吾々國民もさう劣等な國民であるとは思へないから、我邦が頓に衰亡して行かうとは思はないが、併し決して唯安心して反省せずには居られない。餘り迂濶にして居ると取返しのかぬ事になる。未來の國民に申譯が無くなりませまいか。吾々は今や餘程危険な時代に在る又有望な時代に在る。吾々の心掛一つで我皇國の興亡が決せられるのである。夫を思へば實に吾々は共に熱心努力しなければならぬと思ひます。

實は私は前には宗教などの事には餘り考を有つて居りませぬでしたが、此世の中の事は單に物質的方面許りでは到底解し難い所がある。學術の到達する所には所謂不可知といふものがあると思ふて、此に超物質方面を窺つて見やうと云ふ氣になつて來ましたのは、全く明治天皇陛下の御感化を受けましたので彼蓮池畔の感が大に刺戟となつて居ります。此會の如きも矢張りさう云ふ感化から起つて來たのであらうと存じます。實に結構なことであると存じます。甚だ咄辯を以て長く申上げて御迷惑でございませぬ。